

「どうせ」と「せっかく」の意義

「無駄」の回避

星野佳之

はじめに

「どうせ」という語については、次の諸論文が発表されている。

森田良行『基礎日本語』「どうせ」の項（角川書店、一九七七）

森本順子『話し手の主観を表す副詞について』（くろしお出版、一

九九四）

杉本知之「副詞「どうせ」の意味と機能」（愛媛大学教育学部紀

要 人文・社会科学」第三十三巻第一号、二〇〇〇）

これらの先行論において強調されてきたのは、「すでにより基本的な大前提が定められていて、いずれにせよ結局はその大前提通りに事が落ちつくのだという発想」（森田）とか、「その文で述べる出来事が不可避的に起こるという観点」（森本）とか、「その結果があらかじめ決定されていること」（杉本）といった側面であった。そしてこの側面を「どうせ」の「基本的性格」の一つとして捉え、例えば

1 どうせ雨が降るんだから、洗濯はやめよう。

のような用法については、大きな関心をはらいつつも、「既定性と表裏一体をなしている」「どうせ」の短絡性の結果、「理由・根拠を表す文に多用される」といった位置付けを与えるのが、杉本論文である。森本論文の「「どうせ」が結合機能に関わる場合は、〈中略〉理由を示す機能を有する。」といった位置付けも、同様の扱いと理解される。

つまり、「既定性」が「どうせ」の基本的性格であり、「理由・根拠」の用法は二次的なものとして議論されてきたと思われるのだが、寧ろ1のような用法こそが「どうせ」の基本的な姿なのではないかというのが、本稿で試みる主張である。

そもそも、私は「「どうせ」の既定性ということに疑いを持つ。確かに、2 「どうせ私は失格なのよ」と、すっかり落ち込んでいる。（杉本論文より）

のような言い方が「どうせ」には多いと思われるが、

3 どうせ外れるかも知れないから宝くしをを買うのはやめておこう。
のような言い方も、全く許容されないということではないように思う。
少なくとも、

4 どうせ晴れたから、洗濯しよう。

が全き非適格文となるのは大きく異なるであろう。森本論文は、この「不可避免的に起こる」ということのチェックとして、

a 一生懸命練習したら、ジョンは勝つだろう。

b * 一生懸命練習したら、どうせジョンは勝つだろう。

c 一生懸命練習したら、きつとジョンは勝つだろう。

d 練習してもしくなくても、どうせジョンは勝つだろう。

の、a・cが言えてbが言えないことから、「どうせ」は起こるかもしれないし、起こらないかもしれないという文脈とは相いれない」、そしてdが言えることから、先の「不可避免的に……」という結論を導く。しかし、

b 一生懸命練習したらどうせジョンは勝つだろうから、僕た

ちは諦めた方がよい。

とでも手を加えれば、容認可能な文となるのではないだろうか。これも先の3と同じく、「どうせ」の既定性に疑義を抱かせるものである。つまり、1のようにいうときの降雨の既定性は、

雨が降るんだから、洗濯はやめよう。

というときのそれと、変わらないのではないかと思うのである。「どうせ」の表す事態が既定であるというよりも、事情は逆で、事態が既定であると思う人にとって「どうせ」が使いやすいということなのではないかと思うのであるが、それは「どうせ」が「結合」している二事態の関係を見ることによって明らかにできると思われる（注1）。

—

まず、1の例をもとに「どうせ」の意義モデルをたてると、

どうせA、B

といったものになるであろう。AとBとを簡単に見れば、Aの事態を活用したものがB、という関係にある事は、

5 どうせ贈るなら、いいものにした。

6 どうせ合格するんだから、勉強はやめなよ。

などの類例を見ても理解されるであろう。

ここからAとBの関係を詳しく見ていく前に考えておかなければならないのは、本当にA・Bの二項をモデルに組み込む必要があるのか、ということであろう。先行論のように1のような例を二次的に扱わず、寧ろ基本であると考えるには、「どうせA」というモデルでは不十分なのか、ということを考えておく必要がある。

「どうせA。」といった文は、作れるであろうか。

7 どうせ雨が降る。

という文は、自然な文と感じられるか。微妙なラインにあると思われるが、1のような完全な適格文に比べて据わりの悪いことは否めない。では、この文にどういう修正を加えたら、自然な文となるであろうか。

8 どうせ雨が降るんだ。

としても、依然据わりの悪さは残るであろうが、許容度はいくらか増

すのではないか。更に、

9 どうせ雨が降るんだ。洗濯はやめよう。

とでもすれば、これは立派な適格文であろう。9は形の上では二文並置であるが、「どうせ雨が降るんだ」の文が「洗濯はやめよう」という提案の理由説明として働いていることは明らかで、実質的には1と同じ表現価値を持っている。つまり9は、文脈としてはAとBの間に「AなのでB」という順接の関係が働いていて、それによって適格文となっていると考えることができる。構文としては「どうせA。B。」のようになるが、意義を考える上では、「どうせA、B」と把握する方が、妥当であろう。

また、7に対して8の方がいくらか許容度が増すと観察したことにしても、検討しておこう。これにはやはり、「―のだ」のいわゆる説明の機能が、大きく関わっているだろう。8のように言われれば、何らかのことに對しての説明の文と受け止めることになる。8だけでは何に對して説明しているのか明らかではないから許容度は低いままであるが、しかし何かに對しての説明であるという何かが、「洗濯はやめよう」といったものにあたるのかもしれない、という具合に、説明の対象を還元しようと試みるのが、許容度を回復させるのではないか。この論法でいけば、必ずしも文の形が「―のだ」である必要はないということになる。Bの「洗濯するのはやめよう」の前提となる文でありさえすればよいのであって、現に7の後に文を加えて、

10 どうせ雨が降る、洗濯は中止だ！

とでもすれば、許容度はほぼ回復するであろう^(注2)。ということとは、「どうせA、B」という具合に、Bはむしろ不可欠であるといえることになる。

そして一見単独で適格文になり得ると思われる

11 どうせ雨が降るだろう。

についても、同様の理解をした方がよいのではないかと思うのは、この文が実際に用いられる状況を考えれば、必ず何らかの問いに對しての答えになっていると思われるからである。空を見て「雨が降りそうだ」とつぶやくことはできるし、その前後に特に何らかの状況を想定しなければならぬわけではない。しかし、空を見て「どうせ雨が降るだろう」と言ったら、洗濯しようかと思案しているような状況でも想定しないわけにはいかない。これは自問自答の例である。また、「明日自転車使う？」と聞かれて、「いや、どうせ雨が降るだろう」と答えるのは、特に違和感がない。これも、「自転車は使わない」というBを容易に想定できるからであろう。今考えたような場合ではなくて、単に11のような文を単独で用いるという状況は、なかなか想定しにくいと思われる。

二

ここで改めて、A・Bの関係について考えてみる。先に、「Aの事態を活用したものがB、という関係にある」というふうに簡単に触れたのだが、このままでは不十分であることは、

12 どうせ晴れたから、洗濯した。

のような非適格文を見れば明らかである。そして、この12の非適格性に、過去の文であるということは直接的には関係していない、ということを確認しておく必要があるだろう。

13 どうせ雨が降ったんだから、洗濯しないで正解だったじゃないか。

という文は、十分に適格である。では、12の文はなぜ言えないのだろうか。12同様に「晴れ」が確定している文として、次の14を作ることができる。

14 どうせ晴れるなら、休講の日にしてくれればよかったのに。

この文は、晴れたときにしか言えない文であるから、その点では12と共通するものがあるが、「休講の日に晴れる」という事態を仮想している点に注意される。14の文が発せられる実際の状況とは、「講義のある日に晴れた」というものである。つまり、ここで仮想されている「休講の日云々」とは、晴天を有効に活用できたはずの状況である。12はその状況が実現し、有効に活用できた場合で、これが非適格文となる。14は晴天が無駄になったわけであるが、この場合に「どうせ」を用いることができるという現象は、12の非適格と相まって、示唆的である。即ち、「どうせ」は、この「無駄の回避」を大きな要素として持つ語なのではないか、と考えられるのである。

14では無駄が結局回避されなかった。そのために、回避できたような状況を仮想している。1では無駄を回避することが講じられている。そして、晴れたお陰で洗濯できた12では何も無駄にならなかつた。

からこの文に「どうせ」を用いることができないのであろう。今まで説明してきた、7↓8↓9の順に許容度が増すとか、単独では11のようには言えないとかいった現象も、Bが不可欠の要素だからだと考えてきたわけだが、それは更に、回避されるべき無駄が不明になつてしまつてから、何らかの（時としては文の外部に置く形でも）Bが必要なのだ、と理解される。

逆にいえば、回避されるべき無駄が自明で、それに対する発言だということも了解されているときには、必ずしもBは顕在する必要があるということになる。一章の最後で考えた、「明日自転車使う？」「いや、どうせ雨が降るだろう。」は、まさにこの例であらう。「自転車使う？」に対して「いや」と答えていることから、「使わない」というBが明確に問いに対応する。また、

15 ええ、ええ、どうせ私はばかですよ。（森田論文より）

のような場合、森田が指摘する通り「開き直り」となるのは、話題の内部に言及されている無駄を省こうというのではなく、A↓どうせ私はばかだから、B↓この話し合いをすることが無駄だ、ということを開き直りが成立する。

16 いえいえ、どうせ私なんかは平井ですから…。

というのは、B↓私の昇任の話なんかはするだけ無駄ですよ、という形での謙遜である。どちらもその話題の続行を無駄とする発想であるが、その発送が開き直りや謙遜の意図によつて明確であるから、Bがわざわざ言明されなくとも十分に「どうせ」の文として成立するのだ

と考えられる。

三

つまり、Bとは「どうせ」によって危惧される無駄を回避する方策であったり、回避できないと述べる文であったりすることで、その無駄の存在を意識させる事態なのである。それではAの方は何かと考えるに、積極的に価値を見出される事態ではないことが注目される。森本論文において、

17 どうせ今日は母の誕生日だ。おもしろい本を買って送りたい。が言えないということが指摘されているが、これについて同論文では、暫定的解釈として、本稿でBとするものはAに対して「その出来事が許容できるという」意味を持つのであって、17においては「ただ許容できるのでなく、もっと積極的な意志的な意味を持つという点が問題」と考える。しかし

18 どうせ贈るなら、おもしろい本を買って送りたい。

が特に問題がないことを考えれば、むしろ積極的な価値を置かれてならないのは、Aの方であると考えるべきだろう。18の人にとって、A⇐何かを贈るという事は、歓迎されない事態なのであるが、出費を我慢する以上、つまらないものを買うなどという行為は、迷惑なAを完全に無駄にすることなのであって、回避したいということであろう。例えば

19 どうせ降るなら積もってほしい。

というのは、雪を心待ちにしているスキーヤーが言うことではない。雪など迷惑であつて、せめてスキーぐらいいさせて貰わないと不便なだけで丸損だ、と考える人の発言である。「どうせ」を使う場合、Bによって無駄を回避したところで明るい状況が待っているわけではなく、消極的に受け入れたA以上に事態を悪化させない、ということである。このA自体は不問に付すという姿勢が、先行論の言うところの「既定性」「不可避的」にあたるのであろうが、

20 どうせ買わない方がいいものにしたい。

などの例が、「買わない」という選択肢のない状況でしか用いられないかと言われれば、大いに疑問である。そういう状況で用いられることが多いと言ったところに留めるのが穏当ではないかと思うし、よりBとの関わりから浮かび上がる、「さらなる無駄」の方を重視すべきだと考えるのは述べ来たった通りである。

四

さて、以上のように「どうせ」の意義を把握するとき、同時に見ておきたい語がある。それは「せっかく」である。

雨が降ることによって生じる洗濯の無駄を回避しようという「どうせ」に対して、「せっかく」の方は、

21 セっかく晴れたのだから洗濯しよう。

の如く、晴れたという現状を踏まえ、その利点を積極的に活かすこと

をしようというのであり、対照的に見えるが、それだけがこの語を取り上げる理由ではない。それ以上に意味の構造がよく似ているように思われるのである。

まず、「せっかく」も、

せっかくA、B

の如きモデルで把握すべきだと思われる。21が言える一方で、

22 せっかく晴れた。

は不可であろう。そしてこれに「どうせ」の場合と同様の手を加えて、

23 せっかく晴れたんだ。洗濯しようじゃないか。

と適格化することができる。ただ、「—A、B」という構造を有すというだけならば、そのような語は

もし晴れならば、洗濯しよう。

のように他にもある。その中で「せっかく」を「どうせ」と対比してみようというのは、A・Bの関係においても、「どうせ」と同じような分析が可能だからである。

「せっかく」のA・Bの関係を、「Aの利点を積極的に活用するB」という先の簡単な把握で捉えるとして、しかし次の24は成り立つであろうか。

24 せっかく晴れたから、洗濯した。

非適格と言いつけるのはためらわれるが、大きな違和感が残るのではないかと思われる。この文ではAを十分に活かすBという条件が満たされているのだが、それよりも問題なく成立するのは、

25 せっかく晴れたのに、洗濯できなかった。

のように、Aを活かせなかった場合である。この25と、先の21が共に成立することを考え合わせると、「せっかく」の重要な要素に気づく。つまり、Aは十分に活かされることが危機にあることが、前提となっているようなのである。25はまさにAの晴れが無駄になっている。Aを活かしてしまつと24の例のように非適格になる。そしてこの文を、

26 せっかく晴れたから、忙しかったが、洗濯した。

と改めれば、十分な適格分になるであろう。これは晴れが結局は活かされることになったけれども、一度は無駄になリかねない状況があったのを克服したのだ、という状況が浮き彫りになったための、適格化であろう。この克服の文脈が話し手聞き手双方に了解されていれば、それについての言及は特に必要とされないはずで、

27 それでも、せっかく晴れたから洗濯した。

という文は自然であるし、この想定のもとでは、24も十分に成り立つであろう。21とても、Aが無駄になるならんは確定していないが、Bをしようと提案している限りにおいて、Aが無駄になる状況は回避されていない。むしろ無駄になリかねないような状況（21の場合でいえば、洗濯しないまま過ごしてしまいそうな状況）があるから、このような判断をわざわざ示す必要があるのだ。

こう考えると、「せっかく」はAを有効活用するBという関係を示す語であると同時に、その関係をAが無駄になる可能性の範囲内に規定するのである。この点で、「せっかく」のBも、「どうせ」のBと同様

に、Aの有効活用の危機を意識させる事態、ということになる。

五

「せっかく」の語をこのような方向で考えるのは、本稿が最初ではない。「せっかく」については次の先行論があるが、

森田良行『基礎日本語2』「せっかく」の項（角川書店、一九八〇）

渡辺実「見越しの評価「せっかく」をめぐる——国語学から言語学へ——」（『月刊言語』二月号、一九八〇）

森田論文では、

実現困難な事態、もしくはめったに生じない事態、かけがえのない事態、価値ある事態などが実現して、その事態を有効に利用しようとするとき、もしくは、残念ながら利用できないときなどに用いる。

と分析する。「残念ながら」というのは、本稿の「無駄」という把握と同じものと理解できるが、「事態を有効に利用しようとするとき」の方にはそのような把握を見出そうとしないもののように見える点が、本稿の立場と異なる。

渡辺論文の把握は複雑にならざるを得ない。というのは、前半で精緻化した記述を、「本当にこのような複雑な前提を置いた上で、吾々はA（せっかく）の直接係の部分・星野」の価値を認めているのであるか。前提を精密にすればするほど、ネイティブスピーカーとしての

内省から遠ざかる思いを禁じ得ない。」と、放棄してしまうのである。我々の言語能力が、どのくらいの複雑さに堪え得るかということの明らかな知見がない場合は、このような方向転換をする必要がないのではないかと思われるが、渡辺論文の中にそのような論は見られないため、前半（三章まで）と後半で分裂していると把握せざるを得ない。

ただ、その転換の原因となったのは、「せっかく」のAの価値が、Bを伴うことによって認められるものなのか、単独で既に価値ある事態なのか、という疑問に発すると理解される。結局渡辺論文は、「Bが随伴的に成立するという期待と、そのBがまだ実現せず或いは遂に実現しなかった現実とを前提として、Bを随伴的に成立させる可能性を持ち或いは持っていたはずの事態Aを、価値ありと認める話者の評価を表す」という記述を捨て、Bに関わりなくAを価値ある事態と認めるに至る。しかし、そのAに、更に随伴することが期待されるBが、なぜ「未実現」性を帯びるのかということについての説明は、遂に出てこない。逆に論文前半部の記述では、Bを随伴することによってしかAは価値を認められないという把握であり、これでは24が非適格である事実に対応しきれないと思われる。

本稿の立場からいえば、これはAの価値を単独でもあるものなのか否かという二者択一の問いが設定されていることから生じた混乱なのであって、もともと価値あるAを、更に活用する機会を無駄にするかしないかが問題となる語なのだ把握すべきだ、と考えるのである。Aそれ自体に価値があることについては、森田論文の

28 せっかく海外に飛ばされたのだから、この機会に語学でも勉強するか。

が言えず、

29 せっかく海外勤務を命ぜられたのだから、この機会に語学を勉強しよう。

が言える、という指摘から導いた結論に従うべきであろう。そしてその価値（「海外勤務」や「晴れ」）は既に享受されているものであって、無駄になりそうなのは、更なる利益（「語学の勉強の機会」「洗濯」）であることは、用例から明らかである（注³）。また、「Bがなぜ未実現」なのかということについては、未実現の場合の方が無駄が危惧されやすいということであって、その危惧を意識させる状況であるならばBは必ずしも未実現に限られないと考えられることは、24から27について検討した通りである。

この点でも、「どうせ」と「せっかく」の類似は認められるであろう。「どうせ」のAは、それ自体で否定的に受けとめられる事態であり、「せっかく」のAはそれ自体で積極的な価値が認められる事態である。そして「どうせ」の場合はA以上の無駄が危惧されていて、「せっかく」の場合はA以上の利益を得る機会の消失が危惧されている（注⁴）。単純に言えば、A以上の迷惑は被りたくないと考え（「どうせ」）か、A以上の利益を得たいと考える（「せっかく」）かの違いに過ぎないのだということ、次の二例を比較しても納得されるのではないかと思う。

30 どうせ出席させられるのだから、何かを得て帰ろう。

31 せっかく出席させて貰えるのだから、何かを得て帰ろう。

六

最後に、「どうせ」「せっかく」が、「の」や「だ」に従える場合について見ておく。まず、

32 せっかくですが、頂けません。

という言い方であるが、この形でもあくまで無駄という文脈がよく似合う。この場合は、何かをくれるという相手の厚意を無駄にしなければならぬと言う文である。これと、次の33を比べてみる。

33 せっかく彼はくると言ったが、貰うわけにはいかなかった。

この33は、「せっかくAだが、B」といったモデルで把握されるが、これを基準に考えると、32においては、このAが「せっかく」と一体化して「せっかくだが」を成していることが理解できる（注⁵）。「頂けません」が、「せっかく」の「無駄」を意識させる事態Bに相当すること、相手に厚意を示されたこと自体には謝意を示しつつ、実際に物を受け取るという実利までは得られないと述べていることから、³³「せっかくA、B」の全ての要素がこの32に含まれていることは明らかで、モデルをたてれば、

せっかくだが、B

といったものにすべきであろう。同じように

34 せっかくだから、頂きます。

という文について考えれば、やはりこれも、24・25・26・27について考えたところを踏まえて、

せつかくなので、B

といった形で把握すべきである。仮に本心は最初から貰うつもりでいても、「せつかくですから」と言うことによつて、まず厚意を示されたことに謝し、しかし更に物を貰うという利益まで受け取ることは一度危機に瀕したのだ（なぜなら貰わないことも考えたからである）、しかし（あなたの厚意を無駄にするのは申し訳ないので）そこを克服して頂くことにしました、という過程を全て言つたも同然の、誠に便利な用法である。

「せつかくの」といった連体用法も、「せつかくA、B」の影響下にあることは間違いない。「せつかくの本」といえば、

35 せつかくの本をなくしてしまった。

と無駄にするか、

36 せつかくの本だから、大事にした。

と無駄を回避するかのどちらかで、

37 これはせつかくの本だ。

は言えない。また36が言える一方で、

38 せつかくの本を大事にした。

は極めて許容しにくくなると思われるが、これは36では大事にする理由をわざわざ述べるということが、大事にしない場合もあり得たことを意識させるのに対し、38ではそれがない為に、「大事にしては行けないのか」と問い返したくなるような不自然なニュアンスを帯びるか

らだと理解できる。

さて、「せつかくだから／だが」という言い方はあるが、「せつかくなら」という言い方はない。このことは、

39 せつかく晴れるなら洗濯しよう。

という言い方がないことと、やはり対応している。「どうせ」の場合は、

40 どうせだから洗濯してしまおうよ。

41 どうせなら洗濯してしまおうよ。

のように両方の形を持つが、これも

42 どうせやることになるんだから洗濯してしまおうよ。

43 どうせやることになるなら洗濯してしまおうよ。

の如く、「どうせ」の側でも両方を持つことに対応する。そして40・41を、

どうせだから／なら、B

のように把握すべきことは、もう繰り返す必要がないであろう。

「せつかく」の側が、「せつかくの本／天気」のように、自由に連体関係を結ぶのに対して、「どうせ」の方は、「どうせの事に」くらいしか言いようがなく、実質的に連体法を持たないなど、「せつかく」と「どうせ」は必ずしもパラレルに振る舞うものではないが、「どうせ」の一統、「せつかく」の一統の内部では、互いに対応し合っているのである。

そして最も重視したいのは、「どうせ」においても「せつかく」においても、「どうせだ」「せつかくだ」のような終止用法を、基本的に持たないということである。かろうじて、

44 せっかくだ。貰っておこう。

45 せっかくでしたねえ。

のような言い方があるが、44は「貰っておこう」、45は更に主體的な同情・惜しみ情緒といった、B相当のものの存在によって許容されている特例なのだと思うのは、今までの考察に加えて、

46 洗濯できなかったのは／でなくて、せっかくだ。

のような言い方が、まずあり得ないからである。「どうせ」に関しては、

47 どうせだ。貰ってやろう。

は、許容度が劣りつつも言えるのに対し、

48 どうせだったな。／どうせでしたね。

は全くの不可であろう。この点でも、「どうせ」と「せっかく」は足並みを揃えないが、なぜ47が許容されるのかということについては、「せっかくだ」と同様の解釈が可能である。なお、次のような文は「どうせ」においてもあり得ない。

49 洗濯するのはどうせだ。

この、終止用法を基本的に持たないことと、接続法を持つこと、連体用法での振る舞いを考え合わせると、これらの用法においてもなお、「せっかくA、B」「どうせA、B」という意味の構造が存在することが分かる。

ここで比較のために「やっぱり」を見てみると、この語は

50 寝ているかと見てみたら、やっぱり寝ていた。

51 寝ているかと見てみたら、やっぱり起きていた。

のように用いられるから、モデルは

A かと思つたら、やっぱりA/Aだった。

のようになるであろう。「Aかと思つたら」という項が意味の把握の上で必要だと思われるのは、

52 やっぱり日本の首都は東京だ。

のような文でも、「首都＝東京」ということが何かの刺激をもとに改めて問われないことには、成立しないと思われるからである。この「やっぱり」については、

53 やっぱりね。

54 来るとは思っていたが、やっぱりだ。

のように言えるが、

55 やっぱりなのに／なら／だから、来ていた。

などとは言えず、基本的に終止用法しかない。この点で「どうせ」「せっかく」と好対照を為すのだが、これは「やっぱり」の語性からすれば当然のことなのであろう。つまり、

A かと思つたら、やっぱりA/Aだ。

どうせA、B せっかくA、B

のような意味構造を、それぞれに反映しているのであり、構造としては、「やっぱり」は「Aかと思つたら」の部分を、「どうせ」「せっかく」はBの部分を、捨象することなく保っているということである。この点からも、第一章で論じた、「どうせA、B」（そして「せっかくA、B」も）がこの語の意義の基本的構造なのだという考えを主張す

ることができるものと思う。

注1 杉本論文では、「既定性」とともに、「短絡性」「見くびりのムード」を「どうせ」の「基本的性格」に数える。「見くびりのムード」については「ほとんど消滅することがある」と述べるが、「短絡性」についても、「どうせ」の有無にかかわらず、1の例文での雨が降るから洗濯しても乾かないだろう、といった判断が短絡的とは必ずしも思われない。三者とも、そういう例が多いということであろう。

2 森本論文では、「のだ」がつくと許容度が増すという現象について、「理由の表現で『どうせ』をもつ文は、明示的に理由の意味を示すほかの表現からの支えがないと不完全に聞こえるのであるう。」という解釈を提示するが、本稿と同じような把握であると理解する。

3 森田論文では、「せっかくイギリスまで行くんだから、ついでにフランスにも寄ってこよう」という例を挙げた上で、「ついでにもう一つの成果をねらう場合もある。」と、部分的記述に留める。

4 この意味で、渡辺論文が、「せっかくバリまで行ったのですからね、ローマまで足をのばしてきましたよ。」について

「Aだ」の後に、「ただ帰りたくないというわけで」が言外にある、それが「Bだ」に相当し、その具体として、「ローマまで云々」が言われているような感じがある。

と観察することは、支持される。

5 既に、渡辺論文に「圧縮表現」と位置付ける同様の把握がある。

〔付記〕 成稿後に、渡辺実『さすが！日本語』（筑摩書房、二〇〇二）の「せっかく」「どうせ」の項を読む機会を得た。十分な時間を持ってないので、本稿の立場からの言及は差し控えたいが、「せっかく」については、「それ自身が話手にとって価値のあるPが実現しているのに、それに伴って実現してPの価値を完全なものにすることの期待されるQが、まだ実現せず、あるいはついに実現せずじまいとなり、Pの価値が不完全に終ることへの、惜しみの気持ち」、「どうせ」については、「Pに立つ事柄に関して、仮に非Pを頭に思い描いたうえで、さらにそれを否定することで、Pをもはや動かし難い確実な事柄だと評価する」、「QにはPの範囲におさまる選択肢のうち、話手にとってベターと思われるものが立つ」という説明がある。「せっかく」に関しては、前掲論文の前半の記述を展開させたものと理解した。「せっかく」と「どうせ」の構造の類似、という観点は特にふれられていない。本稿は、本学の二〇〇〇年度「日本語学特講Ⅰ」の講義内容に基づく。44は受講学生の作例。

（はしの よしゆき／本学講師）